修　士　課　程

英　語　学　専　攻
国語国文学専攻
心　理　学　専　攻

英語学専攻カリキュラム

修士課程英語学専攻は、英語学を総合的に研究し、体系的な研究指導を行うことを目的とする。個別言語としての英語の性質を、音声・音韻、文法、意味の各分野において探究した上で、人間に固有の能力としての言語の普遍的特性を求めるという、現代の言語理論の方法論に則った研究を推進する。さらに、これを基盤として、社会言語学、心理言語学、言語哲学、言語情報処理などの関連領域を研究することによって、人間の社会的特性、思考や習得のメカニズムに多角的なアプローチをおこなう。

1．カリキュラムの特色と構成

⑴　音声・語・文法・意味を中心とする現代言語学の「中核分野」を主軸として研究し、言語の性質を探求することで人間の認知能力を解明することを目標とする。

⑵　小規模ながら、英語学・言語研究の各分野に教員を配しており、総合的な研究・研究指導が可能である。学生は、特定の一つの分野での研究に限定するのではなく、複数の分野を習熟するようカリキュラムを編成している。

⑶　現代の言語研究では、基礎的研究方法としての語学力とコンピュータの使用は不可欠な道具である。本専攻では、研究推進に必要な語学力の訓練と、コンピュータの基礎から高度な使用までの実習をカリキュラムの重要な位置に据えている。

⑷　語学力の訓練とコンピュータの実習は教育やコンピュータの関連業種に生かされることは言うまでもないが、理論的研究の方法の中にも、実務に有益なものは少なくない。語学系の科目や、「コンピュータ・イン・リサーチ」「フィールド・ワーク」「言語と統計」など、実務への応用が期待される、実務系の科目を重点的に履修することを可能にするカリキュラムを編成している。

⑸　本専攻では、学生の専攻分野によってコース分けをするのではなく、上に述べた総合的な学習を前提として、個人の進路志向に基づいたゆるやかなコースを設定し、伝統的な研究者志向の学生だけでなく、語学の向上を重視して教育や実務に役立てようとする学生や、実務的技能を重視して教育・実務の現場での応用に役立てようとする学生の志向を尊重し、カリキュラムの履修や学位の認定に幅を持たせている。

以上の特色をふまえ、本専攻では次の系統の授業を提供し、構造的に組織する。

語　学　系　統　英語力の向上を目的とする。

英語学系統　英語学の理論的分野および英語学に隣接する応用的分野を研究する。

実　習　系　統　研究・実務の両方に応用できる技能の実習（「コンピュータ・イン・リサーチ」、「フィールド・ワーク」、「言語と統計」など）を中心とする。

2．授業科目一覧表

※前年度（2017年度）からの変更点

・廃止科目

「英語学研究120（言語と哲学Ａ）」	半期	２単位
「英語学研究121（言語と哲学Ｂ）」	半期	２単位
「英語学研究213（異文化理解教育論Ａ）」	半期	２単位
「英語学研究214（異文化理解教育論Ｂ）」	半期	２単位

2．授業科目一覧表

英語学専攻授業科目一覧表

系統	授業科目	科目ナンバー	担当者	配当年次	開講区分	週時間	単位	備考
語学系統	＊ リサーチ・プレゼンテーションA	ME501A	A.E.Jackson	1	前期	2	2	
	＊ リサーチ・プレゼンテーションB	ME501B	A.E.Jackson	1	後期	2	2	
	＊ アーギュメンテーションA	ME601A	P.Spaelti	2	前期	2	2	
	＊ アーギュメンテーションB	ME601B	P.Spaelti	2	後期	2	2	
英語学系統	＊ 英語学研究100(英語の構造Ⅰ)	ME5020	松田謙次郎	1	前期	2	2	
	＊ 英語学研究101(英語の構造Ⅱ)	ME5030	西垣内泰介	1	前期	2	2	
	英語学研究102(音声学・音韻論)	ME5040	P.Spaelti	1・2	前期	2	2	
	英語学研究103(韻律音韻論)	ME5050	P.Spaelti	1・2	後期	2	2	
	英語学研究105(文法研究の歴史)	ME5060	P.Spaelti	1・2	後期	2	2	
	英語学研究106(言語と知識)	ME5070	西垣内泰介	1・2	後期	2	2	
	英語学研究107(文法と意味)	ME5080	西垣内泰介	1・2	前期	2	2	
	英語学研究108(日英対照文法論)	ME5090	西垣内泰介	1・2	後期	2	2	
	英語学研究109(言語と数学)	ME5100	郡司　隆男	1・2	前期	2	2	隔年開講
	英語学研究110(意味論)	ME5110	郡司　隆男	1・2	後期	2	2	隔年開講
	英語学研究111(言語科学方法論)	ME5120	郡司　隆男	1・2	後期	2	2	
	英語学研究112(言語と社会)	ME5130	松田謙次郎	1・2	前期	2	2	
	英語学研究113(談話分析)	ME5140	松田謙次郎	1・2	後期	2	2	
	英語学研究114(言語と認識)	ME5150	久津木　文	1・2	前期	2	2	
	英語学研究115(実験言語学)	ME5160	久津木　文	1・2	後期	2	2	
	英語学研究116(英語授業論A)	ME517A	作井　恵子	1・2	前期	2	2	隔年開講
	英語学研究117(英語授業論B)	ME517B	作井　恵子	1・2	後期	2	2	隔年開講
	英語学研究118(英文法A)	ME518A	西垣内泰介	1・2	前期	2	2	
	英語学研究119(英文法B)	ME518B	西垣内泰介	1・2	後期	2	2	
	英語学研究122(英語授業論C)	ME520C	A.E.Jackson	1・2	前期	2	2	
	英語学研究123(英語授業論D)	ME520D	A.E.Jackson	1・2	後期	2	2	
	英語学研究201(音韻論A)	ME602A	P.Spaelti	1・2	前期	2	2	隔年開講(2018年度不開講)
	英語学研究202(音韻論B)	ME602B	P.Spaelti	1・2	後期	2	2	隔年開講(2018年度不開講)
	英語学研究203(語と文法A)	ME603A	P.Spaelti	1・2	前期	2	2	隔年開講
	英語学研究204(語と文法B)	ME603B	P.Spaelti	1・2	後期	2	2	隔年開講
	英語学研究205(文法と意味A)	ME604A	西垣内泰介	1・2	前期	2	2	
	英語学研究206(文法と意味B)	ME604B	西垣内泰介	1・2	後期	2	2	
	英語学研究207(言語と情報A)	ME605A	郡司　隆男	1・2	前期	2	2	隔年開講(2018年度不開講)
	英語学研究208(言語と情報B)	ME605B	郡司　隆男	1・2	後期	2	2	隔年開講(2018年度不開講)
	英語学研究209(社会言語学)	ME6060	松田謙次郎	1・2	後期	2	2	
	英語学研究210(変異理論)	ME6070	松田謙次郎	1・2	前期	2	2	
	英語学研究211(言語と認識A)	ME608A	松井　理直	1・2	集中	2	2	
	英語学研究212(言語と認識B)	ME608B	松井　理直	1・2	集中	2	2	
	英語学研究215(意味論・語用論A)	ME610A	柏本　吉章	1・2	前期	2	2	
	英語学研究216(意味論・語用論B)	ME610B	柏本　吉章	1・2	後期	2	2	
	英語学研究217(語学教育理論A)	ME611A	作井　恵子	1・2	前期	2	2	隔年開講(2018年度不開講)
	英語学研究218(語学教育理論B)	ME611B	作井　恵子	1・2	後期	2	2	隔年開講(2018年度不開講)

系統	授業科目	科目ナンバー	担当者	配当年次	開講区分	週時間	単位	備考
実習系統	＊ コンピュータ・イン・リサーチA	ME521A	郡司　隆男	1	前期	2	2	
	＊ コンピュータ・イン・リサーチB	ME521B	郡司　隆男	1	後期	2	2	
	フィールド・ワーク	ME5220	松田謙次郎	1・2	前期	2	2	
	言語と統計A	ME523A	松田謙次郎	1・2	前期	2	2	
	言語と統計B	ME523B	松田謙次郎	1・2	後期	2	2	

＊は必修科目

3．修了要件・単位履修方法

修士課程を修了するには32単位を修得し、研究指導を受けた上、後に述べる最終試験に合格しなければならない。本専攻は、修士課程においては学生は英語学の特定の分野に研究をしぼるのではなく、可能なかぎり幅広い複数の分野を学習するべきであると考えている。従って、本専攻では、学生の進路志向により、３つのゆるやかな意味のコースを設定し、それぞれの志向にあった履修の方法を提案している。

A　語学充実コース
B　実務志向コース
C　研究者志向コース

学生は指導教員と相談しながら語学系統、英語学系統、実習系統のそれぞれから自らの目標に合わせた履修計画を立てる。

修士課程学生は、在学中に研究倫理教育の講習を受けなければならない。

4．論文審査と学位認定の方法

英語学専攻では、学生の志向にあわせて、当該のコースで、上のガイドラインに沿った授業の履修をし、かつ修士論文を提出し、審査を受けた上で、さらに、次の３つの中から副課題を選択し提出しなくてはならない。

A　語学充実コース
- 英語力を認定する筆記・口頭試験を受験する

B　実務志向コース
- 受験者が選択した実習の技能を認定する筆記・口頭試験を受験する（データベースやコーパスの制作も含まれる）

C　研究者志向コース
- 修士論文で扱った分野と異なる分野で、「研究論文」１編を期日までに提出して審査を受ける。

修士論文および最終試験、副課題についての詳細は、オリエンテーション時に配布するガイドラインを参照のこと。

5．修士論文　審査基準

修士論文は大学院での研究教育の成果を表すものとして、次の基準を満たすものでなければならない。

⑴　テーマの適切性：修士論文としてふさわしい研究テーマの拡がりと深さがあること。
⑵　研究史の把握：当該の研究テーマについての先行研究が十分に理解され、検討されていること。
⑶　新規性：先行研究の理解をふまえ、独自のデータを提示するなど、当該の研究テーマの発展に貢献する内容を含むこと。
⑷　実証性：当該の研究テーマについての経験的証拠が論文の中で十分に示されていること。
⑸　論証の健全性：当該の研究テーマについての主張の論理的妥当性が論文の中で明快に提示されていること。
⑹　倫理的配慮：研究方法や研究対象に対する倫理的配慮がなされていること。内容によっては神戸松蔭女子学院大学研究倫理委員会の承認を得なければならない。

提出にあたっては次の事項に留意すること。

⑴　使用言語は英語または日本語とし、母語でない言語で執筆する場合は知識のある母語話者によるチェックを受けること。
⑵　学術論文として適切な形式上の要件を満たしており、細部に関しては、専攻で配布する「学位論文作成などに関するガイドライン」に従っていなければならない。
⑶　本人以外の知見を参照する時は適切な方法で引用し、他者の著作権を侵害するものであってはならない。

6．研究・学修指導に関するガイドライン

■はじめに

大学院英語学専攻における学修・研究活動とは、基礎的な学修の中で英語学の下位分野について広く知り、可能な複数の研究テーマを見渡す中で、指導教員との綿密な協議の中で一定の研究テーマを定め、それに関する日常的な学修・研究を行うことである。その結果として、修士課程においては修士論文を完成させることが最終的な目的となる。

■指導教員について

修士課程英語学専攻では、前期後期の各学期ごとに指導教員を変更することを認めている。したがって、修士課程在籍中に少なくとも２人以上の教員を指導教員として希望することが望ましい。これは、学生ができるだけ幅広く、言語学・英語学に関する指導を受けることを期待し、それを可能にするためである。

各学生は各年度の初めに指導教員の希望届を教務課に提出する。また、８月31日（金）～９月25日（火）の間に、後期の指導教員変更の届けを出す。この場合、次の点に注意して届けること。

⑴　修士課程２年次後期の指導教員は修士論文の主たるアドバイザーとなるので、執筆予定の修士論文の内容にふさわしい教員を、当該教員と相談の上届けること。

⑵　修士課程１年次の後期（ないし２年次の前期）に、１年次の前期とは異なる指導教員の指導を受けることが望ましい。

⑶　各学期の初め、指導教員決定後に研究計画書を指導教員に提出する。様式は自由だが、指導教員と協議した上で提出すること。計画書には、当該学期の履修科目と、その学期に重点的に研究する予定の分野に関する具体的な計画をできるだけ詳しく書くこと。

⑷　指導教員の授業に出席する他、アポイントメントをとって定期的にミーティングをもち、研究の進展状況を報告すること。

⑸　各学期の終りに、指導教員の指示に従った書式の研究報告書を指導教員に提出すること。

■研究の進め方について

１．下位分野

言語学・英語学には、大雑把に言って、音韻論、形態論、統語論、意味論、社会言語学、心理言語学、計算言語学、応用言語学（英語教育を含む）などの下位分野がある。１年次前期の「英語学研究100（英語の構造Ⅰ）」「英語学研究101（英語の構造Ⅱ）」でこれらの分野について集中的に概観するので、この授業の中でどの分野が自分に一番向いているのかを慎重に見極めることが大切である。ただし、これらの一つの枠組の中でしか研究ができないわけではなく、２つ以上の下位分野にまたがるテーマで、独創的な研究をなし遂げる可能性も常に考えておくべきである。

２．研究対象

分野が大体定まったら、研究の対象となる現象を絞る。その際、あまりにも狭い現象に絞ってしまうと、後に、修士論文としての膨らみをもたせるのに苦労することになるが、かと言って、あまりにも広い現象を扱おうとすると、与えられた年限では完成しないことにもなりかねない。研究対象の適切な広さについては、指導教員と相談の上で決めること。

３．先行研究の把握

自分の研究テーマの先行研究を適切に把握することこそ、修士課程での学修・研究活動におけるもっとも重要な部分である。修士論文において、当該の研究テーマが過去にどのように研究され、それについてどのような知見が表され、どのような論争が存在したかを適切にまとめることは不可欠な部分となる。

先行研究を見るにあたっては、その分野の専門家である指導教員の助言を求めることが重要だが、インターネットのGoogle Scholarなどを利用して学生自身が関与する文献を調べることが可能であるし、論文などの著作物がインターネット上に公開されていることも多いので､それらを効率的に利用することも必要である。忘れてならないのは、本学の図書館は比較的蔵書が充実しており、図書館蔵書検索システムOPACを活用することは大学院生として必須のことがらである。

４．オリジナリティ

修士課程での学修・研究において高度なオリジナリティが即座に求められるものではない。修士課程のレベルでのオリジナリティは、先行研究を着実に把握することの上にのみ存在することを認識するべきである。

自分ではオリジナルなアイディアと思っていても、それが過去においてすでに常識的な知見となっているということはよくあることである。

従って、修士課程のレベルでのオリジナリティは、先行研究を適切に把握した上で、過去の代表的な研究の知見についての自らの考えを述べる、あるいはあるポイントについての相反する考え方がある場合に、それらについて自らの立場を表現するなどがオリジナリティの表現であるが、それらもあくまで先行研究の成果に根ざしたものでなければならない。単なる思いつきによるコメントは感想文の域を出ないものである。

後述するコーパスなどを効果的に活用して、先行研究に関連するデータを掲示することは、オリジナリティを示すひとつの堅実な具体例といえる。

5．データについて

研究を進める上での言語データの収集には、大きく３種類がある：作例、実験、コーパスである。

作例　統語論、意味論のデータは、ひとが実際に発話したり書いたりした文ないし文章であることが理想と考えられるかも知れないが、生成文法ではひとが発話した文ではなく、ひとが発話しうる文・発話しえない文を研究対象としている。そのため、論文の著者がデータとしての例文を自分で作る例が多い。これはあくまで例文が思考の表現と理解するべきである。

したがって、修士課程のレベルで作例のデータを用いるのは、先行研究で用いられている例を思考と論理にもとづくヴァリエーションにとどめることが望ましい。

実験　上記の作例を、個人でなく、自分以外の集団に判断させるものである。この場合、判断者が必ずしも言語的に均一の集団であるとは限らず、例文で何を問題として判断すべきが全員意識できているとは限らないので、文脈などの情報を十分に与える必要がある。また、どのように実験を統制しても、結果には多くの場合ばらつきが出るので、適切な統計的処理を加えた上でないとデータとしては使えない。

コーパス　英語ではCorpus of Contemporary American English（COCA）、日本語では国立国語研究所が提供する『中納言』などがあり、これらを効果的に活用することは現代の言語学研究では必須である。

6．学会参加

一定の学問分野ごとに学会という、研究者どうしの集団が組織されている。言語関係の学会も、規模の大小、地域の広がりに応じて、例えば、日本言語学会、日本英語学会、関西言語学会、日本語学会など、さまざまなものがある。

学会に参加することで、最先端の研究発表にふれたり、同年代の大学院生の研究活動を知ることができる。修士課程１年次でいきなり学会に参加しても、どうせむずかしくてわからないと考えず、理解できなくてもその雰囲気にふれることで得られるものがある。

毎年６月に行われる関西言語学会（KLS）の大会は、地理的にも行きやすいところで開催され、さまざまな分野の研究にふれるよいチャンスであり、おすすめのイベントである。（2009～2012年には、本専攻の教員がKLSの事務局を担っていたという事実も、記憶しておいてほしい。）

本大学院は学会参加に対して補助を行っているので、大いに利用してほしい。

修士２年次の学生は学会に参加するだけでなく、研究発表に応募することにチャレンジしてほしい。発表論文をまとめることは修士論文を作成する中で大きなステップとなる。応募した発表が採用され。研究発表することは将来に生きる業績となるだけでなく、他大学の研究者から貴重な質問やコメントを受けることも期待できる。

7．必須の知識・技能

LaTeX　修士課程１年次に必修科目「コンピュータ・イン・リサーチ」で習得する、コンピュータ組版システムLaTeXは、本専攻でぜひ身につけてほしい技能である。「美文書作成」というのが一般的なイメージだが、LaTeXは学術文書を作成することを目的に作られたものであり、論文作成に関わる一般的な必須事項が最初から組み込まれたものである。これに習熟することで学術的な文書を書く上での知識が高まるということがある。

構造化された文書に必須の章・節立てや例文の番号付け、それらのクロス・レファレンスなど、MS Wordでやってみると必要以上に苦労するものだが、これらはLaTeXにとってはごく簡単な操作ですむものである。また、bibTEXを使う文献の管理、文献リストの作成はMS Wordとはまったく次元の違うものである。その他、例文のグロスつけ、樹形図作成、高品位の発音記号表示など、言語研究に特化したマクロが多彩に存在する。

Praat 高度な機能を備えた音声解析のソフトウェアで、現在は無料で公開されている。Windows、Mac、Linuxとすべてのプラットフォームで用いることができる。

統計 数学 論理 言語実験に限らず、統計について一通りの知識を得ておくことは必須である。また、理論言語学では数学・論理学の知識が必要となるので、早い段階で基礎を学んでおくことは役に立つ。

最後に、論文執筆の道具としてだけでなく、データの整理・処理など、研究を進める上で、コンピュータを十分に使いこなせることは必要不可欠な技能である。これも早い段階で身につけておくこと。

■学位論文について

それぞれの専攻の最終年度には、学位論文を提出する。英語学専攻の修士論文の作成・提出の際には、以下の事項を満たすこと。

1．論文は、本専攻では、ワープロ・ソフトではなく、修士課程１年次に必修科目「コンピュータ・イン・リサーチ」で修得する、コンピュータ組版システムLaTeXを使用して作成することを推奨している。これは、Microsoft社のWordに代表されるワープロ・ソフトは、そもそも論文執筆の道具として設計されておらず、実際に論文を作成し出すと、さまざまな困難に直面し、それを解決するのに無駄な労力がかかるからである。

2．修士論文の題目提出と論文提出の日程は以下の通りである。

(a) 修士論文を2018年度に提出する予定の者は、研究題目の登録を、2018年９月26日（水）～10月２日（火）の間に、教務課でおこなう。

(b) 修士論文は、2019年１月８日（火）～15日（火）の間に、教務課に提出する。その際、論文（正本１部、副本２部)、論文要旨（３部)、所定の学位申請書を添えて提出すること。

(c) 論文要旨は、論文本文の言語にかかわらず英語と日本語で作成する。長さは、Ａ４用紙で、３ページ程度を目安とする。

3．論文の使用言語は英語または日本語とする。英語が望ましいが、対象言語が日本語であり、大量の日本語データを提示する必要があるなどの場合は、日本語による執筆でもやむをえない。この場合、あらかじめ指導教員の許可を得ること。

4．論文の組版は基本的に、LaTeXによる。この場合、修士論文用のスタイルファイルおよびそのサンプルを指定されたサイトからダウンロードして、必ずこれを用いること。

5．上記スタイルファイルによる組版の場合、体裁は、英語・日本語とも、Ａ４横書き、左右上下のマージン、約2.5cm、フォントサイズ12ポイント、１頁あたりほぼ30行となる。枚数の制限は特に設けないが、修士論文としてのレベルを満たす必要にして十分な量にすること。

6．明確な理由がある場合は、ワープロ・ソフトの併用を認める。この場合、LaTeXによる組版と大きく体裁が変わらないように、スタイル機能を活用して章・節立てなどのフォーマットを行うこと。また、これらのソフトウェアの調達は自己の責任においておこなうこと。

■副課題について

修士論文の提出とは別に、副課題の提出を要求する。最終試験の判定はこの副課題および修士論文に基づいて総合的になされる。

研究者志向コース：

書こうと思っている修士論文と異なる領域の研究論文１編を、2018年７月13日（金）（７月提出の場合）あるいは、2019年２月15日（金）（２月提出の場合）までに提出すること。ここで言う「領域」は、言語学（英語学)の理論的分野と応用的分野にまたがってもよいし、理論的分野の中のさらに細分化された研究分野(例えば統語論と音韻論）でもよい。修士論文の領域と研究論文の領域が十分に異なるかどうかの妥当性を、修士論文の指導教員および研究論文の内容に一番近い教員の２名から事前に許可を得ておくこと。

実務志向コース：

データベースやコーパス、形態素解析用の辞書、語学学習プログラムなどを自力で作成し、サーバー上へ実装した上で、仕様書（データベースの目的と構造、プログラムの動作など）を2018年７月13日（金）（７月提出の場合）あるいは、2019年２月15日（金）（２月提出の場合）までに提出した上で、デモンストレーションをおこなう。

語学充実コース：

英語力を認定するための筆記・口述試験を2018年７月あるいは2019年２月におこなう。ただし、期日までにTOEFL 600点以上（CBTでは250点以上）、あるいは、TOEIC 900点以上の成績を得ているものは、その証明書の提出をもってこれに替えることができる。（受験後５年以内に限る。）

■重要な日程

修士課程、博士課程を通じて、定期的に中間報告会をおこなうとともに、副課題報告会、学位論文の最終報告会をおこなう。これらの報告会においては、コンピュータ出力とプロジェクタを用いたプリゼンテーションなど、わかりやすいプリゼンテーションを心がけること。

	修士論文	副課題	Ｄ１、Ｄ２	博士論文
2018年７月13日（金）		提出		
８月31日（金）～９月５日（水）				題目登録
９月中旬	中間報告会Ⅰ		中間報告会Ⅰ	中間報告会
９月26日（水）～10月２日（火）	題目登録			
11月末	中間報告会Ⅱ			
11月24日（土）～30日（金）				論文提出
2019年１月８日（火）～15日（火）	論文提出			
２月15日（金）		提出		
２月下旬	最終報告会		中間報告会Ⅱ	最終報告会

ただし、副課題は７月か２月のどちらか一方に提出すればよい。２月に提出のつもりの人も７月にはテーマは決めておいて概要を発表すること。